

よい議論をする

前半担当 鈴木壮平

- ▽ われわれの生活において、さまざまな事態・問題を扱う上で他者との話し合いはまぬがれないものである。そのときよりよい解決策を見つけるためにわれわれ自分の考え・主張がもっとも適切であると主張する。そしてまたたいの場合相手も同様に自分の考えを主張してくる。このときわれわれは互いの主張内容の「良し悪し」「強さ弱さ」を適切にとらえ、評価を下し、毅然とした態度で、しかし柔軟に対応していくことが大切である。
- ▽ 主張の良し悪し、強さ弱さを正しく認識し評価する能力
 - ①他人に自分の考えを説得力のあるやり方で主張できる
 - ②自分自身の考え方や議論の仕方が適切なのかチェックできる

1,よい議論

『議論』…二つの定義 ①何かの正確さ、正しさを主張すること
②根拠のしっかりとした理由によって裏づけした上で何かの正確さ、正しさを主張すること

説得力は①<②

①、②の違い：「根拠のしっかりした理由による裏づけ」

この裏づけがある議論がよい議論であり、その根拠のしっかりさの度合いがその議論自体のよさとなる

2,演繹的議論・帰納的議論

演繹 ・前提から論理的に正しい形式にのっとして結論を導く

- ・ 前提と論理展開の形式が真⇒結論は真
- ・ 「前提または形式が偽⇒結論は偽」は成り立たない

帰納 ・個々の現象から一般的な結論を導き出す

- ・ 結論の確実性は保障されない
- ・ 確実さの度合いは前提の量、質によって判断

3, 演繹的議論を評価する基準

演繹的議論の構成は次の三つに分けられる

- ・ 前提
- ・ 前提から結論に至るまでの論理展開
- ・ 結論

よって、この議論の正しさを評価するには、上二つについての妥当性・真実性を評価する。本文ではこれを前提の真実性と形式の妥当性と呼んでいる。

上2つともが正しいとき結論は正しい。

条件論法

「もし～ならば一だ」という形をとる議論法（演繹的議論の一種）

- ・ 前提に一般法則（もし～ならば一だ）と、ある事例に関する条件をすえて、それらを合わせて結論を導くもの
- ・ 前提や結論によっては、明白すぎる場合は示されないこともある

↓

しかし、明示されなかった前提を共有できないと、話をしている両者の主張の受け取り方が違ってしまうことがあるので、注意が必要。なるべく省略せずに考えるようにするべき。

* 許可の主張と義務の主張の混同

条件論法では、「もし～ならば」の「～」が起こったときには「一である」も部分の「一」は必ずおきることではなければならない。よって「一」が許可であるときには、上で述べた条件論法の性質は正しく使うことができない。